

Title	日本トルストイ文献目録(一)
Author(s)	法橋, 和彦
Citation	大阪外国語大学学報. 57 p.79-p.95
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80896
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本トルストイ文献目録(一)

1886年(明治19年)

森 體 訳 『泣花怨柳北欧血戦余塵』(原題「戦争と平和」、その冒頭の一部抄訳) 忠愛社
8月

1889年(明治22年)

森 鷗 外 訳 「瑞西館に歌を聴く」(第一稿)(原題「リュツェルン」) 読売新聞 11月6日
～29日

1890年(明治23年)

「魯国の小説及び小説家」 国民之友74号 2月

植 村 正 久 「欧州の文学其二 トルストイ伯」 日本評論 9号 7月

徳 富 蘆 花 「露国文学の泰斗 トルストイ伯(上中下)」 国民之友95・97・98号 9・
10月

1891年(明治24年)

徳 富 蘆 花 「トルストイ伯の飲酒喫煙論(上中下)」 国民之友116～118号 4・5月

1892年(明治25年)

十 八 公 子 訳 「黄金鳥」 国民新聞 ?～2月11日
(松居松葉)

北 村 透 谷 「トルストイ伯」 平和2号 5月

森 鷗 外 訳 「瑞西館」(原題「リュツェルン」)(『水沫集』所収) 7月

植 村 正 久 「トルストイの近著」 日本評論 10月

森 鷗 外 「トルストイが一著述」(「観潮樓偶記」のうち) 柵草紙35号 8月

1893年(明治26年)

桑 原 謙 蔵 「露西亜最近文学の評論 其二 トルストイ」 早稲田文学第1次第1期第33
号 2月10日

桑 原 謙 蔵 「露西亜最近文学の評論 其三 トルストイの作中人物の問題」 早稲田文学
2月25日

不知庵主人訳 「春風裡(其1～7の中)」(原題「家庭の幸福」) 女学雑誌 4月—1894年1
(内田魯庵) 月中絶

林 丘 子 訳 「おひたちの記」(原題「幼年時代」第13章まで) 裏錦7～14号 5月～12月
(桑原謙蔵)

幸 田 露 伴 訳 「初陣」(原題「セヴァストーポリ」の最初の数章) 国会新聞 7月16日～8
月27日

*露伴全集別巻下(岩波書店 昭55.3.28, 506-507ページ)によれば、「初陣」は露伴名で国会新聞(7月16, 18, 19, 23, 25—30, 8月1—5, 8, 9, 11—13, 16—19, 22, 23, 25—27日)に連載されたが、もとの訳者は露伴ではなく、弟の幸田成友である。成友はその事情を自著『凡人の半生』(共立書房 昭23.4.25)のなかでつぎのようにのべている。「偶々語学修業のために読んだトルストイのセバストポールの英訳の一部を訳して兄に示したら、兄はそれに縦横に加筆し、「初陣」と題して国会に載せた」(同上書116ページ)

林 丘 子 義 訳 「御苑の露」 裏錦 8月

「トルストイ小伝」 少年園 8月

残 月 庵 訳 「小児と馬術の稽古」 国民新聞 8月20日

不知庵主人訳 「凄涙(其1—13)」(原題「ポリクーシカ」) 国民之友199号付録—210号 8—12月

田 山 花 袋 訳 『コサアク兵』(原題『コザック』)(世界文庫第8編) 博文館 9月

「海外思潮 科学と勤労(ゾーラ対トーストイ)」 国民之友211号 12月

浪 華 散 人 「トウストイ伯の福音」 真理49—52号 12月—94年2月

(丸 山 通 一)

「欧州に於ける徳義思想の二代表者フリテリヒ・ニッシュ

氏とレオ・トウストイ伯との意見比較」(雑記欄) 心海4号 12月

1894年(明治27年)

「ニッシュ氏とトウストイ伯徳義思想を評す」(雑記欄) 心海5号 1月

小 西 増 太 郎 「露西亜のトルストイ」 国民新聞 1月3日

操 岳 仙 史 訳 「二人の老翁」 裏錦 1—8月

(小西増太郎)

小 西 増 太 郎 「露国思想の近況」(上中下) 1・3・4月

植 村 正 久 「新ユダヤ教(トルストイの宗教)」 日本評論60号 2月

植 村 正 久 「トルストイの立脚地」 福音新報 2月

「海外思潮 此世の天国(トーストイの新福音)」 国民之友220号 3月

無 署 名 「春宵夜話」(『寓話』の中の5話) 家庭雑誌 3月

小 西 増 太 郎 「露国の哲学」 哲学会雑誌86号 4月

内 田 魯 庵 訳 『めをと』(原題『家庭の幸福』)(世界文庫第14編) 博文館 5月

「トルストイ伯の宗教道德論」 六合雑誌162号(雑記欄) 6月(「コンテンポラリー・レビュー」誌掲載の梗概)

無 緑 生 「教育家としてのトルストイ」 国民新聞 6月24日

(未 詳)

小西増太郎訳 「靴師」(原題「愛のあるところに神あり」) 国民之友233号付録 8月

U・K 「新文豪 魯国の新文豪トオストイ」 早稲田文学68・69号 7月26日・8月10日
(金子筑水)

「トルストイ伯の宗教論」 心海15号 11月

小西増太郎 「トルストイ氏の世界観に就て」 湖畔論集 11月

1895年(明治28年)

「トルストイ伯の無為論と其批評」 心海18号 2月

安部磯雄 「トルストイ伯の宗教」 六合雑誌 7月

小西増太郎 「クレーツエロウ」(原題「クロイツェル・ソナタ」) 国民之友 8～12月
・尾崎紅葉訳

小西増太郎 「トルストイ伯の所謂宗教に就て」 六合雑誌 12月

1896年(明治29年)

小西増太郎 『名曲クレーツエロフ』(原題『クロイツェル・ソナタ』)(国民小説第6)
・尾崎紅葉訳 民友社 2月

小西増太郎訳 「主人と下男」 毎日新聞 2月11日～3月11日

小西増太郎 「宗教と徳義」 5～8月

小西増太郎訳 「スレトの珈琲店」(原題「スラートのカフェー」) 国民之友 6月

徳富蘆花 「トルストイ」 反省雑誌 6月

太田玉茗訳 「断崖」 太陽 10月

徳富蘇峰 「トルストイ翁を訪ふ」 国民新聞 10月13日(国民之友11月号に再録)

小泉八雲 「トルストイの芸術論」「トルストイの『復活』について」(東京帝国大学における講義ノートをおこしたもの) 第一書房刊「小泉八雲全集」12巻所収
1896年～1903年,(田部隆次訳 小泉八雲「文学論」「続文学論」興風館1946年に再録)

「欧州現代三文豪の人生観」 心海40号 12月

1897年(明治30年)

失名氏訳 「二人巡礼(1～3)」 大日本 1～8月
(内田魯庵)

不知庵主人 「ゾラの『戦塵』の後に書す」 文芸倶楽部「雑録」欄 2月

遠山ゆき子 「『めをと』(原題「家庭の幸福」)を読みて」 婦人新報 3月
(国木田独歩)

友坂生 「マリチク・ス・パリチク」 家庭雑誌 4月

徳富蘆花 『トルストイ(拾式文豪第拾巻)』 民友社 4月

「鍛心教につき」(ニュー・センチュリー・レビュー) 反省雑誌(雑纂欄)
8月

瀬尾生 訳 「^{クレーストウニク}代子」(原題「^{なづけ}洗礼の子」) 裏錦 10月

徳富蘆花 「トルストイ伝補遺」 国民之友 11月

徳富蘆花 「トルストイ家の家庭教育(上下)」 家庭雑誌 11～12月

1898年(明治31年)

天溪生 訳 「トルストイ伯の書翰(トルストイのヘンリー・ジョージ説に関する意見)」
太陽 4巻4号 4月

西海枝 静 「トルストイ翁新美術論」 帝国文学雑誌 7月

1899年(明治32年)

「トルストイの心理」 心海66号 2月

高山樗牛 「文面の裏面」 太陽(時事評論・文芸界) 4月

内村鑑三 「トルストイ伯の平和策」(原題「平和会議に関する書翰」「紐育インデペン
デント」より訳出) 東京独立雑誌 5月

森 鷗外 「トルストイ」(「隣のたから」2回) めさまし草巻之41 11月30日

1900年(明治33年)

山縣五十雄 「トルストイの博愛主義」 東京独立雑誌 1月

千 八 「心頭語」(55) 二六新報 7月17日
(森 鷗外)

植村正久 「トルストイ伯正教会を逐はる」 福音新報 10月

「人道の偉人 同胞主義の使徒トルストイ(露国農婦の実話)(上下)」 東
京評論 10・11月

安孫子貞次郎 訳 「侵入」 東京評論 10月(創刊号) ～1901年4月

田山花袋 訳 「セバストポール」(原題「セヴァストーポリ」) 東洋戦争実記 11・12月

1901年(明治34年)

岸上質軒 訳 「あはれ支那人」(原題「ある支那人に与うる書」) 1月

モーリス・アダム 「トルストイとニーチェ」 中央公論(反省会雑誌改題初号) 1月
「トルストイ伯の芸術論(社説)」 国民新聞 2月24日

丹下時子 訳 「うつつの夢」 女学世界 4月

中島孤島 「19世紀末の二大小説—トルストイ伯とニーチェ氏」 読売新聞 4月
「人道の偉人レオ・トルストイ」 5月

「トルストイの破門」(外報欄) 六合雑誌 6月

嵯峨の屋おむろ 訳 「セバストウポルの火花」(原題「セヴァストーポリ」) 太陽 7月

西海枝 静 「トルストイを論ず」 帝国文学 10・11月

羽川隠士 「トルストイの文学観」 早稲田学報 10月

嵯峨の屋おむろ 訳 「セバストウポルの落城」(原題「セヴァストーポリ」) 太陽 12月

1902年(明治35年)

上田駿一郎編『トルストイ伯及其の家庭』同文館 1月

森 しづか訳「夜と朝」(原題「復活」の一部) 小天地** 5月

**大阪金尾文淵堂刊(明治33・10-36・11第三卷第三号まで) 明治32・1-5「ふた葉」と改題三号をだす. 新体詩を主とする文芸誌. 主幹=薄田泣菫, 平尾不孤, 角田浩々歌客編輯. 明治38年9月, 啄木が盛岡にて発行せし「小天地」とは同名異誌.

斎 木 仙 酔「トルストイの豪吟」(詩人文士評伝)『詩星文星』 所収 新星社 5月

長 谷 川 天 溪「トルストイの芸術観」早稲田学報 5~7月

鷗 水 生「科学的自然派の時代去り, 博愛的トルストイの時代去り, 野獸的マキシム・ゴルキーの時代来り」文芸界4号 6月

内 田 魯 庵 訳「馬鹿者イワン」(原題「イワンのばかとそのふたりの兄弟」) 学鑑 6~11月

「トルストイ露仏同盟を罵る」 中央公論 9月

加 藤 直 士 訳『我懺悔』 警醒社 9月

紅葉山人・夏葉女史訳「アンナカレーニナ」文薈1~6号 9月~1903年2月
(尾崎紅葉・瀬沼夏葉)

宮 田 脩「トルストイの科学説」学鑑 10月

善 休「トルストイ」学鑑 10月

(内 田 魯 庵)「露国文学の批難」 中央公論 11月

1903年(明治36年)

「ゾラの生涯とトルストイ翁の評言」 中央公論 1月

中 島 孤 島 訳「幸福(イリヤスの話)ートルストイ伯50年の祝賀」新小説 2月
(蔵一)

加 藤 直 士 訳『我宗教』 文明堂 3月

住 谷 天 来 訳「19世紀の予言者」 4月

「トルストイ翁の教育観」 中央公論 4月

片 上 伸 訳「貧民窟」 新声 4月

神 東 惇 訳『人生の意義』 経世社 5月

「写実小説とトルストイ伯夫人」 中央公論 6月

島 村 抱 月「ツリの『レサクション』」(『滞欧文談』春陽堂明39年7月収録) 新小説 7・8月

梧 堂 山 人「トルストイ著作年譜」 学鑑 9月
(内 田 魯 庵)

無 名 氏 訳「復活」 毎日新聞 9月15日~12月?日
(内 田 魯 庵)

- 中 島 孤 島 「トルストイのモーパッサン論」 新小説 9・10月
(蔵一)
- 斎 藤 野 の 人 「嗚呼トルストイ伯や」 帝国文学 9 卷10号 10月
(信 策)
- 妄 人 「妄語 (イブセン 『戦争と平和』 『アンナ・カレーニナ』 他) 万年艸巻第 9
(森 鷗外) 10月
- 枯 川 生 抄 訳 「一人の要する土地幾許 (面白きロシアの寓意小説)」 平民新聞第 1 号 11
月15日
- 斎 木 仙 酔 訳 『教訓小説集』 (「愛ある処其処に神あり」「穀粒」「黄金」「三老翁」「人間は
何によりて生活するものなるか)」 日高有倫堂 12月
- 加 藤 直 士 訳 『トルストイ之人生観』 (杜翁著「人生」の訳) 警醒社 12月
- 1904年(明治37年)
- 無 署 名 「ドークホボアの話 (絶対に兵役に服するを拒む宗派)」 平民新聞第10号
(西川光次郎) 1 月17日
- 「トルストイとドルバート大学」 六合雑誌 1 月
- 「トルストイの戦争観」 平民新聞 3 月13日
- 姉 崎 正 治 「ロシアの国情とトルストイ」 時代思潮 3 月
- 覆 面 論 士 「トルストイに与ふる書」 読売新聞 3 月
- 「トルストイ翁の手簡」 平民新聞 5 月15日
- 「トルストイ氏の文明論」 平民新聞 5 月29日
- 高 階 柳 蔭 訳 「捕虜の逃走」 (原題「コーカサスのとりこ」) 文芸倶楽部 5 月
- 三 浦 浩 天 「露西亜の秘密」 文芸倶楽部 5 月
- 内 村 鑑 三 「無抵抗主義の教訓」 5 月
- 剣 南 「トルストイ伯の白露戦争観『火の柱』」 読売新聞 6 月
(小山田)
- 円 融 生 「トルストイの小著述」 学燈 6 月
(内田魯庵)
- 魯 庵 「兵器を焚きて非戦を宣言したる露国の宗教」 太陽10巻 8 号 6 月
- 「トルストイ伯の戦争観」 白露戦争実記 博文館 6 月
- 中 島 孤 島 「トルストイ伯の小説」 新小説 6・8・9 月
(蔵一)
- 二葉亭四迷訳 『筒を枕に』 (原題『セヴァストーポリ』) 金港堂 7 月
- 曙 夢 生 「トルストイ伯の反動的 정신」 読売新聞 7 月
(昇)
- 嵯峨の屋おむろ訳 『セバストウポルの落城』 春陽堂 7 月

加 藤 直 士 「トルストイ伯の日露戦争観（付録・トルストイの時局談 倫敦タイムスの批評）」 日高有倫堂 8月

宮 崎 湖 処 子 「トルストイ伯の非戦論の価値」 聖書之道 8月

柳川春葉，内田旭，原田春鴻，田中花浪訳

『セバストポール』 国民書院 8月

「トルストイ伯の戦争論」 国民新聞 8月2日

堺枯川・幸徳秋水訳 「トルストイ翁の日露戦争論」 平和新聞第39号 8月7日

幸 徳 秋 水 「トルストイ翁の非戦論を評す」 週刊平民新聞40号 8月14日

安 部 磯 雄 The Influence of Tolstoi in Japan 平民新聞（英文欄）40号 8月14日

「ト翁の日露戦争観に対する反響」 六合雑誌 9月

斎 藤 野 の 人 「トルストイ伯の日露戦争論を読みて現代の文明に対する彼が使命を懷ふ」
雑誌・トルストイ伯，トルストイ伯と我宗教界，生ける詩人の活事業，天才
なき国民，トルストイ伯と基督教，露国のトルストイ伯，トルストイ伯，ト
ルストイ伯と民衆，トルストイ伯と科学，トルストイ伯と社会主義， 帝国
文学10巻9号 9月

『トルストイの日露戦争論』（付録に平民新聞所載「ト翁の非戦論を評す」）

平民社訳 文明堂・信陽堂 9月

「トルストイの戦争観短評（ブラック・アンド・ホワイト）」 中央公論 9
月

成 川 生 「トルストイ翁の戦争観」 中央公論 9月

「トルストイの日露戦争論」（英文） 時代思潮 9月1日号

「杜翁非戦論に対する反響」 平民新聞 9月11日

田 山 花 袋 訳 『哥薩克兵』（原題『コザック』） 博文館 10月

高 橋 五 郎 訳 「杜伯品藻」（トルストイの義人物を評す） 有倫堂 11月

「トルストイ翁の家兄の計」 六合雑誌 11月

ケンウォルシイ 訳 「トルストイ訪問記」 学鑑 11月～1905年2月
・砂丘子(内田魯庵)

山 口 孤 剣 詩「トルストイ」 週刊平民新聞 12月4日（明治文学全集83－372に再録）
（義三）
「トルストイ翁の近状」 平民新聞 12月18日

内 田 魯 庵 訳 「馬鹿ものイワン」（少年世界文学全集のうち） 富山房

1905年(明治38年)

橋 本 青 雨 訳 『男女観』（付録に「人生の意義」） 金港堂 1月

「トルストイとクラポトキン」 平民新聞 1月29日終刊号

大 島 秀 蘭 訳 「行者」 天鼓 2月

- 魯 庵 生 訳 「トルストイ談」 学鑑 2月
- 水 田 南 陽 訳 「脚本 悪魔の捕虜」 中央週報 3月
(栄雄)
- 魯 庵 生 「夢に老翁と語る」 学鑑 3月
- 訳 者(魯 庵)識 「社告『復活』日本 3月31日
- 内 田 魯 庵 「トルストイの『復活』を訳するに就き」 新聞「日本」(学鑑4月号に再録)
4月3日
- 魯 庵 生 訳 「復活(1~218)」 新聞「日本」 4月5日~12月22日
- 落合浪雄訳述 『悲劇やみのちから』 文明堂 5月
(昌太郎)
- 長 谷 川 天 溪 「トルストイ伯の技倆(『アンナ・カレニナ』を讀みて) 太陽 5月
- 内 海 信 之 「北光」(日露交戈の秋 大哲トルストイ翁を想ふ) 白虹 第1巻第5号
(泡 沫) 5月5日(明治文学全集83-379/384に再録)
- 田 岡 嶺 雲 「漫月旦トルストイ伯」『うろこ雲』所収 嵩山房 6月15日
- 黒 岩 周 六 「愛と恋との別を知れ トルストイは尊敬すべき人に非ず」 新公論 7月
(涙 香)
- 「トルストイ伯夫人の戦争観(倫敦タイムス)」 中央公論 7月
- 堺 枯 川 「一人の要する土地幾許」『半生の墓』(創作翻訳及文集)所収 平民書房
8月
- 大 塚 保 治 「露国の三大平和論者」 太陽第11巻第10号 8月
- (中 島)孤 島 「芸術とは何ぞや(トルストイの芸術観)」 新小説 9月
- 内 田 魯 庵 「トルストイ(露国)」 中学世界 9月
- 「トルストイ伯の近状(リテラリー・ダイゼスト) 中央公論 9月
- 「ト翁の天国観 無我の愛 第7号 9月10日
- 鱈 鯨 生 訳 「新羽衣」(原題「人はなんで生きるか」) 火鞭1巻1・3号 9・11月
- 河 上 肇 「社会主義論第11信, トルストイの社会主義観—平民社諸氏との比較」 読
売新聞, (『社会主義評論』 読売新聞社, 明39年1月に収録) 10月1日~12
月10日
- 山 口 孤 剣 「科学万能主義を排す」火鞭1巻3号 11月
(義 三)
- トルストイ伯の現代文明に対する批評(倫敦タイムス)」 中央公論 11月
- 宮 崎 湖 處 子 「与小杉天外君書」 火鞭1巻4号 12月
(八百吉)
- 徳 富 蘆 花 「トルストイ」 12月

1906年(明治39年)

- 内 田 魯 庵 訳 『イワンの馬鹿』 火鞭会(金尾文淵堂) 1月
- 宮 崎 湖 處 子 「トルストイ伯の非戦論の価値」 火鞭1巻5号 1月

- 春海浩平 訳 「トルストイの聖書句解」 火鞭1巻5号 1月
- 中里介山 「小さき理想」 火鞭1巻6号 2月
- 魯庵 訳 「復活抄」 文章世界 2月
- 河上肇 「無我愛と政治、杜翁の『イワンの馬鹿』を読む」 無我の愛17号 2月
- 緑痕生 「イワンの馬鹿」 中央公論 2月
- ちょいん生 訳 「麵包一片」 中央公論 3月
- 平野萬里 訳 「楽人のおとろへ」(原題「アリベルト」 明星3号 3月
(久保)
- 長谷川天溪 「文芸と問題、時代の終局(トルストイの論文)」 太陽 3月
- 河上肇 「杜翁小感」 読売新聞 4月
- 白柳秀湖 「文学者としてのトルストイ」 火鞭2巻2号 4月
- 宮田脩 「杜翁の道德対宗教の關係に就いて」 火鞭2巻2号 4月
- 中島孤島 「芸術とは何ぞや」 火鞭2巻2号4月
- 安成貞雄 訳 「別れ霜」(原題「三つの死」) 火鞭2巻2・3号 4月
- 目白の里人 訳 「トルストイの聖書句解」 火鞭2巻2号 4月
- 山口孤剣 訳 「鉄道人夫」(原題「現代の奴隸制度」) 火鞭2巻2号 4月
- 島中翠湖 「乱脈なる現時の思想界」 火鞭2巻2号 4月
- 金子喜一 「TO LYOF N.TOLSTOI」(英詩) 火鞭2巻2号 4月
- 魯庵生 「トルストイ研究のしるべ」 火鞭2巻2号 4月
- 柴田流星 『アンナ・カレニナ』 上田屋 4月
「トルストイ翁の精神的革命論(フォートナイトリー・レビュー)」 中央公
論 4月
「杜伯の白露戦争観」 太陽第12巻第4号
『三大文豪』英語青年社編輯(ゾラ・トルストイ・イブセンの英文ならびに訳
注評伝) 有朋堂十銭文庫第六 5月
- 河上肇・小田頼三 訳 『人生の意義』 今古堂 6月
- 中里介山 編 「トルストイ言行録」 内外出版協会 7月
- 古河濁流 訳 「死の三個」(原題「三つの死」) 新古文林 8月
- 中島孤島 「仮面を脱すべき時は来れり—トルストイとゴールキイ」 太陽 8月
- 徳富蘆花 「意外の厚遇(トルストイとの会見)」 読売新聞 8月
- 樗陰生 「近時の翻訳書(『宇宙の謎』『アンナ・カレニナ』及び無絃氏の訳詩を評
(澁田)
す)」 中央公論 8月
「トルストイの近業訳せらる エヒヨー」 中央公論 9月
- 白虹生 訳 「嗚呼支那人」(原題「ある支那人に与うる書」) 新潮 9月

岩 野 泡 鳴 「メレジコウスキのトルストイ論を読む」 早稲田文学 9月
斬 雲 「トルストイの女執事に由て記されたるトルストイ伯の日常生活」 学鑑 9月

剣 菱 訳 「時代末論」 読売新聞 9月
百 島 操 訳 「悪魔のたくらみ」 福音新報 10月
有 馬 祐 政 訳 『芸術論』 博文館 10月
筑 山 正 夫 訳 「二人巡礼」 新人 11月
徳 富 蘆 花 『順礼紀行』 警醒社 12月

1907年(明治40年)

内 田 魯 庵 訳 『イワンの馬鹿(付・トルストイ伝)』 火鞭会 1月
徳 富 蘆 花 「トルストイ日省録」 読売新聞 1月
剣 菱 「トルストイの沙翁論」 1月
「トルストイ攻撃」 やまと新聞 1月
百 島 操 「トルストイ伯の家庭」 福音新報 1月
松 浦 一 「トルストイ伯の沙翁論に就いて(1—12)」 東亜之光 1—12月連載
斯 波 貞 吉 「沙翁とトルストイ」 新公論 2月
曙 夢 「トルストイ翁の金言」 太陽 2月
山 路 愛 山 「トルストイ婚姻論・基督教論・芸術論」(「泰西思想の神髓(一名、大なる思想と短き言葉)」のうち) 独立評論 2月
荒 井 恒 雄 訳 「ステラの茶亭」 六合雑誌 2月
百 島 操 訳 「悔改めたる罪人」 福音新報 2月
長 谷 川 天 溪 「トルストイ翁の沙翁論を読む」 早稲田文学 2月
中 島 孤 島 訳 「高架索の囚人」(原題「コーカサスのとりこ」) 新小説 2月
「トルストイ伯の代理者(チェルトコフ)の手翰」 革命評論9号 2月25日
宮 崎 湖 處 子 「トルストイ論」 中央公論 3月
トムソン 音羽生訳 「偽多き小説家—露国第一の自由人—」 新潮 3月
百 島 冷 泉 訳 『トルストイ小説集』 中外出版協会 4月
(操)
トムソン 音羽生訳 「白粉のはげたトルストイの素顔—偽多き小説家」 新潮 4月
徳 富 蘆 花 「文範 トルストイ翁」 文章世界 6月
神 崎 順 一 訳 『下僕の生涯』 平民書房 7月
百 島 操 訳 「二人巡礼」 福音新報 8月
徳 富 蘆 花 「文範 トルストイ翁の書斎」 文章世界 9月
百 島 操 訳 「神の教子」 福音新報 10月

- 白 柳 秀 湖 「北欧の双星」 離愁 10月
 小 田 頼 造 訳 『人道主義』 隆文館 11月
 有 秋 「ト翁とその人生観」 二六新聞 11月
 昇 曙 夢 「トルストイの日常生活」 早稲田文学 11月
 坪 内 逍 遙 「トルストイ対シェークスピア」 早稲田文学 11月
 近 松 秋 江 訳 「生ひたちの記」 新小説 12月
 昇 曙 夢 「トルストイ論」 露西亞文学研究 12月

1908年(明治41年)

- 木 下 尚 江 「トルストイ論」 新天地 3月
 (山 本)白 泉 「トルストイの芸術論」 和融誌 3月
 百 島 冷 泉 訳 『トルストイの二人巡礼』(通俗文庫10冊のうちの5) 内外出版協会
 百 島 操 訳 「大悪魔小悪魔」 福音新報 3~9月
 小松(杉?)乃帆流 「メレジコフスキーのトルストイ論」 加持世界 4月
 『露国革命の意義』を読む」 東京社会新聞 4月25日
 「近代36文豪」 文章世界臨時増刊号 5月
 曙 夢 「ヤスナヤ・ポリヤナの星影」 早稲田文学 8月
 近 松 秋 江 訳 『生ひたちの記』(少年篇) 東京国民書院 9月
 逸 見 士 峰 訳 「門付」 文芸倶楽部 9月
 「英仏に於ける杜翁誕生祝賀 杜翁死生観」 二六新聞 9月
 内 田 魯 庵 「トルストイ及『復活』著述始末」 学鐙 10月
 小山内 薫 「トルストイの『暗黒の力』(西洋近代劇の舞台面2)」 歌舞伎 10月
 筑 山 正 夫 訳 『長恨』(原題「クロイツェル・ソナタ」) 昭文堂 10月
 「トルストイの誕生祝賀会」 早稲田文学 10月
 内 田 貢 訳 『復活(前篇)』 丸善(1920年5月金尾文淵堂より再刊) 11月
 (魯庵)
 戸 川 秋 骨 「徳富蘇峰に贈りてアンナ・カレニナの情操を論ず」 文章世界 11月
 近 角 常 観 「実験の信仰に就て」 東亜之光 11月
 風 葦 生 「復活(前篇)」 日本及日本人 12月1日
 風 葦 生 「『復活』の翻訳」 新声 12月
 徳 富 蘆 花 他 「トルストイに就いて」 新天地 12月
 「『復活』(新刊批評)」 帝国文学 12月
 残 月 「杜伯とその事業」 時事新報 12月

1909年(明治42年)

- 篝 火 生 「復活(前篇)」 ホトトギス 1月

- 小 栗 風 葉 「復活(前篇)」 新公論 1月
 昇 曙 夢 「80歳を迎へたるトルストイ」 学燈 1月
 斎藤野の人訳 「流刑者」 太陽 1月
 羽生白玄訳 「家庭の幸福」 1月
 住 谷 天 来 「トルストイの福音」 1月
 上 田 敏 「トルストイ」 中央公論 2月
 徳 富 蘆 花 「トルストイ訪問」(『時文軌範』所収) 水野書店 2月
 魯 庵 「感じを現はす言葉(罪と罰・復活の抄)」 文章世界 3月
 (草野)柴 二 訳 「死」 二六新聞 3月
 (若杉三郎) 「漫画泰西三文豪」 趣味 4月
 「復活に現はれたるトルストイの宗教」 アカネ 4月
 曙 夢 「杜翁のゴーゴリー論」 二六新聞 4月
 百 島 操 訳 『トルストイ小説集』 4月
 加 能 作 次 郎 「トルストイとドストエフスキー」 ホトトギス 5月
 中 沢 臨 川 「レオ・トルストイ」 趣味 5月
 秋 江 「トルストイの技巧」 文章世界新緑号 5月
 曙 夢 「トルストイ伯に就て」 読売新聞 5月
 榎本秋村訳編 『トルストイの教訓及び其の自叙伝』 内外出版協会 6月
 (恒太郎)
 加 藤 直 士 「ルーズベルトのトルストイ論」 基督教世界 6月
 島 村 抱 月 「『復活』私議」 新潮 6月
 「トルストイとツルゲネフの決闘」 趣味 7月
 谷 の 人 訳 「綾子」 万成新聞 8月
 神 崎 沈 鐘 訳 「人間生活」 新声 10月
 中 沢 臨 川 「レオ・トルストイ」 趣味4巻10号 10月
 秋村榎本恒太郎訳 『人生の意義』(杜翁叢書第一編) 内外出版協会 10月
 秋村榎本恒太郎訳 『想神録』(杜翁叢書第二編) 内外出版協会 10月
 風 骨 「エドモンド・ゴッスのトルストイ論」 新小説 10・11月
 1910年(明治43年)
 小田頼造・金尾種次郎訳 「簡易聖書」 1月
 内 田 貢 訳 『復活(後篇)』 丸善 1月
 (魯庵) 「海外消息」 趣味 3月
 野 水 「トルストイ伯」 秀才文壇 3月
 H・H 生 「レオ・トルストイの矛盾 文芸講演会を聴く」 4月

- ベ ー リ ン グ 「露国地主の文学談」 文章世界 4月
- 篝 火 生 「復活(後篇)」 学燈 4月
「復活批評」 帝国文学 4月
- 島 村 抱 月 「復活の脚色」 新潮 4月
- 富 士 川 游 「医学的に観たるトルストイ伯」 中央公論 6月
- 幹 三 「海外文壇 若きトルストイとツルゲネフの争」 新潮 8月
- 枯 柳 「杜翁最近の自己告自」 新小説 8月
「露西亜文豪分布図」 学生文芸 9月
- 原 田 春 鈴 「鷗外森博士と語る」 毎日電報(日曜附録) 10月9日
(森 鷗外)
- ヘンリー・ジョージ 「海外文壇 トルストイ訪問記—日本よりの帰途」 新潮 10月
- 児 島 貞 訳 『酒と煙草』 東京独立出版社 10月
- 加 藤 直 士 「杜翁の失踪に就て」 基督教世界(?) 11月
- 水 野 葉 舟 「海外文壇『復活』を読みて」 新潮 11月
- 曙 夢 「杜伯と現代文学」 露西亜文学第2号 11月
- (三 浦)天 民 「トルストイの死」 朝日新聞 11月
「杜翁の隠遁」 万朝報 11月
「杜翁の隠遁」 国民新聞 11月
- モリスベアリング 「トルストイとツルゲネフ」(上) 日本及日本人 11月
- 流 影 生 「杜翁を弔す(社説)」 読売新聞 11月19日
- 内田魯庵(談) 「杜翁の二大事件」 国民新聞 11月19日
- 島 村 抱 月 「トルストイ芸術及思想」 読売新聞 11月27日
- 嵯峨舎, 長江, 尚江, 鼎浦, 観潮, 直士, 曙夢
「トルストイ観」 教文評論 12月
- 昇 曙 夢 「トルストイ伯を偲ぶ」 中央公論 12月
- 瀬 沼 夏 葉 「アンナ・カレニナの一節」 読売新聞日曜付録トルストイ号 12月4日
- 植 村 正 久 「トルストイ伯」 福音新報 12月
- 曙 夢 「トルストイの逸話」 毎日電報 12月
「逝ける杜翁」 新小説 12月
- 生 方 敏 郎 「ト翁逝く」 青年 12月
- 米 川 正 夫 訳 「教育漫言(トルストイ)」 記者「露西亜より」「アネクドート」「戦争と平和」
梗概「田園の歌」「村の三日」「最初の記憶」「トルストイ訪問記(モーシ
ン) 露西亜文学(トルストヴ記念号) 12月
「トルストイに就て 病床のト伯」 読売新聞 12月

「トルストイ近什数篇」昇曙夢訳「トルストイ書簡二則」「トルストイ著作に
関する統計」「トルストイの計に就いて」 早稲田文学 12月

高 安 月 郊 「悲劇としての杜翁」 時事新報 12月

内 村 鑑 三 「トルストイ翁を弔ふ」

1911年(明治44年)

昇 曙 夢 『偉人トルストイ伯』(付録にトルストイ著作年表, 著作統計あり) 春陽堂
1月1日

円 山 賢 次 「ト翁に関する狭い追懷」 文章世界(増刊黄鳥号) 第6巻第1号 1月

中 沢 臨 川 「闇と光—杜伯のことども」 早稲田文学 1月

「逝けるトルストイ」(文芸消息) 早稲田文学 1月

高 瀬 武 次 郎 「道家の徒と儒家及び老子とトルストイ」(「道教管見」のうち) 東亜之光
1月

彙報「トルストイ伯逝く」 東亜之光 1月

柳 宗 悦 「杜翁が事ども」 白樺 1月

上 田 敏 「レビンのトルストイ」 芸文 1月

西 田 幾 太 郎 「トルストイに就て」 芸文 1月

田 山 花 袋 「トルストイの死」 文章世界 1月

幽 芳 「トルストイの死」 毎日電報 1月

曙 夢 「杜翁の後の事ども」 国民新聞 1月

(小 島)鳥 水 「トルストイと冬の自然」 読売新聞 1月

犀 花 「逝ける杜伯」 読売新聞 1月

「トルストイの基督教」 宗教及び文芸 1月

曙 夢 「逝けるトルストイ」 時事新報 1月

(児 玉)花 外 「基督と杜翁」 時事新報 1月

金 子 筑 水 「トルストイの追想」 太陽(「明治文学全集50」(筑摩書房)所収) 2月

真 山 青 果 「脚本 文明の結果」 文芸倶楽部 2月

一 宮 栄 訳 「三つの死」 芸文 2月

無 名 氏 「棕鳥通信(杜翁最后時分の電報)」***スバル 2月
(鷗外)

*** 偉大な作家にふさわしい年譜というものは、それを読むものの立場からいえば、せいぜい履歴書の程度にとどめるか、さもなくば日々の日記のごとく際限なく変化連動するものであることがのぞましい。トルストイについて、わが国で、この模範をふたつながら示したのは森鷗外であった。

1899年に37歳の鷗外は「隣のたから」でトルストイをとりあげ、作品の短評を主とする私家版トルストイ著作年譜とでもよぶべきものを作成した。あえて私家版とここでいうのは、鷗外の文

学的出発からして、とくに『舞姫』執筆前後の時期、およびのちの大逆事件審理との関係において、深く主体的にトルストイの諸作品と交渉をもってきた経過があり、それがはからずもまずここに浮上したからである。しかもそれは鷗外の秘めたる生き方そのものにかかわっていた。鷗外はトルストイ文学の怒れる力の源泉にふれて、それが生涯にわたる鷗外自身の履歴をも規定するかのよう、ただひとつの視点から強い押しだしで書いている。

その鷗外が1909年1月から1913年12月までつづいた「昴」に『棕鳥通信』を欠かさず寄せた。これは、かつて十年前の「隣のたから」の形をかえた続篇とみるべきではなかろうか。外国発通信文の形式は、先進国の社会生活に生起する文学（者）や芸術（家）について、最新の情報を提供するとともに、それらを現象学的な取捨選択において、いささかの私情なしに並べてみせたかにみえる。だが全55回の通信中、トルストイにかんする最後の一年と死後の記事とが89項目を占めていて、その異例さはまさに鷗外のトルストイへの熱い注目を語る以外のなにものでもなかった。

そればかりではない。1909年8月6日までと、1911年3月4日以後の通信文には、すべてかならず通信日（発信日）が末尾に記載されているのだが、その間、5回の通信文だけでは、信じがたいことだが、通信日が欠落してしまっている。この時期、鷗外はまた大逆事件の渦中にもあった。獄中の秋水をみるように、鷗外はトルストイの死の予感にとらわれて、日常平生の慣習を逸したのであろうか。この5回分、半年たらずの通信に、トルストイにかんする報道が38回もある。1日分に3度あがる日もあった。ゆるされるならば、日に時間をきざんでも、鷗外はトルストイ最後の年譜を書こうとしたのだらう。

こうした鷗外の、唯一トルストイにかんする異例にして異常な関心のありようは、ここだけにとどまらぬ勢いでつづいている。通信文としては、いくらか記事から逸脱していることを鷗外はその他のところでも書いた。その書き方が、また常規を逸したまま通している。たとえば——

一九一〇年四月十三日発信——「フランスのアカデミイの Vicomte Eugène Melchior de Vogüé がパリで六十一歳で亡くなった。トルストイやドストエウスキをフランスに紹介した人である。Jean d'Agrève といふ小説も書いた。」

一九一一年十二月二十五日発信——「トルストイ、ビョルソン、フォンタァネ、皆好い娘を持てゐた。」

一九一二年五月二日発信——「外国旅行をして帰り掛かった Mereschkowski は Wirbalen で荷物を調べられて、『アレクサンデル帝』の原稿とトルストイの諸著作とを押収せられた。」

小説の頭になりそうな、こうした記事の逸脱性は、鷗外にとって、やがて史伝物へと発展していく重要なひとつの契機となったと推測してもよいだろう。鷗外がトルストイの場合にみせた『棕鳥通信』における異常さや逸脱こそ、彼が伝記や年譜といったたぐいの対象に執着するさいのいつわらざる歴史的姿勢といえようか。

ともあれ、本当のトルストイの年譜を書くためには、鷗外がみせたほどのしんからの打ちこみがたえず内的に要求されるはずである。その生について、その文学について、トルストイは鷗外にとっての羨望であり、また強力な磁場をもってひきつける鉄の鏡でもあった。わたしがここではたしえなかったトルストイ最後の一年についての詳報は、『棕鳥通信』の通信日なしの通信文を参考にされたい。

- 「ロシアより」 露西亜文学 2月
- 諸 家 「偉人トルストイ」 学生文芸 2月
- 近 松 秋 江 「杜翁に就ての感想二三」 学生文芸 2月
- 記 者 「トルストイ翁の隠遁事情と臨終」 国民新聞 2月4日
- 青 木 精 一 「杜翁大観」 2月
- 田 波 御 白 「杜翁小品」 東亜之光 2.3月
- 島 村 抱 月 「トルストイの教訓劇と悪魔」 東亜之光 6巻3号 3月
- 昇 曙 夢 「チエホフとトルストイ」 露西亜文学 3月
- (中 村) 星 湖 「トルストイの恋」 読売新聞 3月
- 記 者 「トルストイの書翰」 朝日新聞 3月
- 柳 水 「トルストイ作『闇の力』の成立」 劇と詩 3月
- 相 馬 生 訳 「トルストイの臨終」 大阪講壇 3月
- 竹 友 藻 風 訳 「イワン・イリッチの死」 基督教世界 3月
- 川 島 風 骨 訳 「無宿者」 学生新芸 4月
- 長 沢 武 雄 「1910年のロシア文学」 露西亜文学 4月
- 鷗 南 「暗黒の力」 歌舞伎 4月
- 「トルストイと山上の垂訓」 宗教及び文芸 4月
- 吉 山 旭 光 「活動写真の『アンナ・カレニナ』」 歌舞伎第131号 5月
- 広 政 正 夫 「トルストイの『闇の力』」 (欧州劇壇通信) 早稲田文学 5月
- 「トルストイの書翰」 露西亜文学 5月
- 無 名 氏 「名文評釈 暗黒の力——トルストイ」 新潮 6月
(内田魯庵)
- 「トルストイの書翰(つづき)」 露西亜文学 6月
- 大 住 舜 『性慾論』 精神修養社 6月
- 久 須 美 幸 松 「トルストイの見たる男女の関係」 早稲田文学 6月
- 田 中 王 堂 「トルストイの絶対主義を論ず」 (『丁酉倫理会倫理講演集』所収、のち『哲人主義』下巻へ収録)
- 相 馬 御 風 「偉大なる人格、力ある描写—トルストイの『アンナ・カレニナ』」 新潮 7月
- アアサア・シイモンズ 「露西亜魂・ゴルキイとトルストイ」 帝国文学 7月
大貫晶川訳

- 山 本 迷 羊 「トルストイの書簡」 帝国文学 7月
- 小 林 愛 雄 「トルストイの批判」 帝国文学 7月
- 昇 曙 夢 「ト伯邸宅の買上」 読売新聞 7月
- 土 岐 哀 果 「1910年の夏の日記より」 秀才文壇 7月
(善磨)
- 生 田 長 江 訳 『トルストイ語録』 玄黄社 9月
- 砂 丘 子 訳 「人間の要する地面幾許ぞ」 9～12月
(内田魯庵)
- 平 野 臥 龍 訳 「ある少年との対話」 文章世界 10月
- 平 野 臥 龍 訳 「男女両性観」 文章世界 10月
- 坪 内 逍 遙 「教化機関としての演劇」 早稲田講演 11月
「耶穌の教理」 新時代 11月
- 昇 曙 夢 「書簡に現はれた杜翁の内生活」 読売新聞 11月
「生と死」 文章世界 12月
「杜翁の『生きた屍』著作権問題の解決」 12月
- 中 沢 臨 川 「闇と光」 早稲田文学